



都市から中越への人の流れを作る 「にいがたイナカレッジ」事業のこれまでとこれから



—長岡市小国法末集落「ムラビトになる旅」より—
法末集落の伝統行事「道楽人形」を復活させる催しが行われました。

contents

P2-3 特集

NEXT イナカレッジ

「にいがたイナカレッジ」事業の成果と展望

P6 糸魚川市大規模火災被災地支援活動のご報告

P7 コラム「震災アーカイブに関わる近年の動向」

P8 シリーズ4 コマまんが「川口の冬」、インフォメーション、施設のご案内、会員募集

P4-5 シリーズ

防災教育の現場から 第10回 長岡市立東中学校

中越メモリアル回廊の教育資源を活用した防災学習事例

図：「にいがたイナカレッジ」事業内容



特集

NEXT イナカレッジ

ムラビト・デザインセンターが取り組み、今年度で5年目を迎えている「にいがたイナカレッジ」事業のこれまでの成果とこれからの展望をレポートします。

表：これまでの「にいがたイナカレッジ」参加者・定住者（平成24年度～28年度）

	参加者	定住者	備考
平成24年度	4人	0人	
平成25年度	4人	0人	
平成26年度	8人	7人	
平成27年度	8人	6人	このほか1名卒業後に移住予定
平成28年度	6人	5人	(予定)

「にいがたイナカレッジ」 インターシップ事業とは

ムラビト・デザインセンターは、中越地震で被災した地域の復興支援を目的に二〇〇八年から活動をしています。震災から経た年月のそれぞれの時期において起こってくる状況に対応し、柔軟に内容を変化させながら活動を進めてきました。その中で、二〇一二年よりスタートしたのが「にいがたイナカレッジ」のインターシップ事業です。同事業は、震災からの復興で様々な取り組みを進めてきた地域からの「自分たちが積み重ねてきたものを引き継いでいってくれる」「担い手」をこれから作っていかねばいけない」という声がありました。

インターシップ事業は、簡潔に言えば、一年間都市部から中越の山間部の集落へ移住し、その地域の暮らしを学ぶプログラムです。都市から移住するインターン生にとっては自らが目指す地方での生活を一年限定でまずは実践できるプログラムであり、地域にとっては、地域内に数少ない若手人材が一年間来ることで地域に活気が生まれるということであったり、両者が両想いになればその地域に定住する可能性もあるということが同事業に取り組むモチベーションとなります。

都市から中越への人の流れを作る

インターシップ事業は、毎年八地域に各一名、つまり八名のインターン生を募集しています。この人の募集が当初はかなり苦戦をいたしました。

◆「集落の人たち同士が顔を合わせる機会、話し合いの場が増えた。」「よその集落や団体等との関わりができた。」

◆「これからも、どんな外から人を迎え入れたい。」

などの感想をいただいています。何も知らない都会の若者が来て一緒に様々な活動を行うことで、地域の人たちが色々なことを若者に教えるという事は、地域の鏡効果となり、住民自身が地域や暮らしの魅力を再確認し、惹いては地域住民の誇りの醸成へとつながっていると考えてことができます。

また、このような声が地域から聞こえてくるということは、地域とインターン生両者の間に非常にいい人間関係が生まれている証拠だと思えます。そのような関係作りこそが、先ほど紹介したインターン生の定住に大きく関係しているのではないかと考えられます。

中越の中山間地域の今 「雇用はないけど、仕事はある」

中越の中山間地域は、イナカレッジのプログラム等を経て県内に移住する人が増えていますが、それ以上に地域の担い手不足が深刻化している現状もあります。

例えば、地域の草刈りでも、これまでは草刈りは集落の人たちがするものでしたが、担い手不足が進む最近では、「日当はでるけど、やってくれる人がいない」という状況にあります。これは草刈りなどの日当仕事だけではなく、酒蔵や農産加工などの季節的な仕事、店舗のスタッフ、事務仕事など、さまざまです。

しました。ただ単に、一年間のインターン生を募集をしていますといっても、どう都市部にいる人に中越の地域の魅力を伝えればいいのか、その点がはじめの課題でありました。

「都市から地方へ」と一足飛びに「移住・定住」というのは現実的に厳しく、イナカレッジでは、移住・定住に至るまでの段階的な取組（きっかけづくり↓交流↓お試し↓移住・定住）が必要と考え、首都圏でのイベント開催や、全国的にも大きなムーブメントを作るに至った「移住女子」のプロジェクトなど、短期で中越に来てもらうプログラムなど、長期インターンを核として、図のようなプログラムに取り組んできました。

これまでの成果 若者が一年、村に暮らすというインパクト

一年間の長期インターンに参加した人は、この五年で三〇名になりました。そのうち、今年度のインターン生で定住予定の方を含めると、県内に定住した方は一八名となります。まだ手探りであったはじめ二年を除けば、ほとんどの方が受け入れ地域やその周辺地域へ定住をしています。

◆「若い人と一緒に働くことで張り合いが生まれた。」

◆「人に何かを、教える“ことができるのは幸せなことだ。”

◆「集落の雰囲気が変わった。明るくなった。」

◆「（お婆ちゃんの一言）（「集落にとって）自分のできる事があれば言ってくください。」

二〇一六年一二月に開催したインターン生入地域のワークショップ『NEXTイナカレッジミーティング』のなかで、地域の中でよそ者に出せる仕事を列挙いただいたところ、二五種類七八個の仕事が挙げられました。

イナカフリーランス求人

25種類78コの仕事出してきました

13の地域団体
で仕事をあげたら

- ☑野菜農家の手伝い（13件）753円/h～
- ☑除雪の手伝い（11件）1,000円/h～
- ☑米農家の手伝い（6件）800～1,000円/h
- ☑飲食店の手伝い（6件）753円/h～
- ☑地域の草刈りなどの手伝い（6件）800円/h～
- ☑宿泊施設の手伝い（5件）
- ☑施設管理（5件）800円/h～

- ☑イベントの手伝い（3件）1,000円/h～
- ☑食品加工の手伝い（3件）
- ☑酒蔵の手伝い（2件）1,000円/h～
- ☑情報発信の手伝い（2件）
- ☑何でも屋（2件）1,000円/h～
- ☑自分で農産物を作って売る（2件）

- ☑農協の手伝い（1件）
- ☑スキー場の手伝い（1件）
- ☑小売店の手伝い（1件）
- ☑法人事務（1件）
- ☑塾講師（1件）
- ☑和紙工場の手伝い（1件）
- ☑マキ売り、つくり（1件）
- ☑可能性？
- ☑タイヤ交換（1件）
- ☑協力隊の右腕（1件）
- ☑可能性？
- ☑定家管理（1件）
- ☑福祉施設（1件）
- ☑体験のコーディネート役（1件）

一般的に「地方には仕事がない」と言われますが、それは正確ではなく、正しくは『雇用はないけど、仕事が増えている』というのが実情だと思います。今後は、このような地域で溢れかえっている仕事と都市部の若者を結びつける、ムラ仕事専門の人材派遣“を立ち上げていきたいと考えています。

ムラビト・デザインセンターでは、「ネクストイナカレッジミーティング」と称して、今後のインターンシップや仕事づくりについて関係する皆さんと共に検討する場をこれから継続して開催していきます。

（ムラビト・デザインセンター長 阿部 巧）

シリーズ「防災教育の現場から」

第10回 長岡市立東中学校「防災に関わる生き方から学ぶ」

～中越メモリアル回廊の教育資源を活用した防災学習事例～

平成25年度末に完成し、新潟県下の小中学校および関係機関に配布された「新潟県防災教育プログラム」。これをきっかけに、学校教育現場での防災教育の取組みが定着し、継続して実施されるよう、当機関紙では、シリーズ「防災教育の現場から」として、県内の小中学校での先進的な取組み事例を紹介してゆく。

長岡市立東中学校 3年生「防災に関わる生き方から学ぶ」実施概要
 ○日時：平成28年5月～11月（総合的な学習の時間）
 ○場所：長岡市立東中学校・長岡震災アーカイブセンターきおくみらい
 ○対象：防災コース選択の3年生（36名）

「防災に関わる生き方から学ぶ」年間活動

- 5月中旬 コース別ガイダンス（中越防災安全推進機構）
- 6月中旬 昭和保育園と合同避難訓練（地震体験車使用）
- 7月中旬 きおくみらい訪問
- 7月中旬 地域の防災組織の現状と課題について（長岡市危機管理防災本部）
- 9月上旬 AED・応急処置研修（長岡市消防本部）
- 9月中旬 パッククッキング講習（元 おぢや震災ミュージアムそなえ館 高野真弓さん）
- 9月下旬 被災体験談&ワークショップ（やまこし復興交流館おらたる 畔上凌さん・中越防災安全推進機構）
- 11月下旬 総合学習発表会

長岡市立東中学校は長岡市の中心部に程近い場所に位置しており、学区は市の中心街を占め、デパート・商店・金融機関等が多く集まっている。長岡震災アーカイブセンターきおくみらいもこの学区内にあり、以前から授業の一環で当施設を見学してもらうことが度々あった。今回はそのつながりから、3年生の総合的な学習の時間「郷土長岡の人々を考える」で、「防災コース」を選択した生徒への学習内容に関して、年間を通してコーディネートに携わることとなった。

東中学校の総合学習は、産業・福祉・平和・文化・防災の五つのコースに分かれ、それぞれでテーマに沿った学習を深めていく。今年度のねらいは「地域の人々との交流を通して、進路意識や人権・福祉感覚を身につけ、自分の育った地域を大事にし、自分の将来の生き方を考える」である。そのため、防災コースでもできるだけ、地域の人々に焦点を当て、生徒自身が生き方について考えられるような学習プログラムを提供したいと考えた。

まず、生徒がコース選択をする際に重要となるコース別ガイダンスでは、四月に発生した熊本地震の被災地へ支援に行った当機構スタッフから、熊本の支援を通して感じたことを元に「なぜ中学生が防災を学ぶのか」というテーマで講話を行なった。災害時には中学校が避難所になるため、学校内のみならず地域についても詳しく、知力体力のある中学生は、災害時には周りから期待される存在であることを説明したところ、コース定員上限の

災害時の中学生の役割を考えるワークを行なうため、中越大震災当時中学生だった、やまこし復興交流館おらたるスタッフの畔上凌さんをゲストスピーカーとして招き、当時の被災の様子から自分が感じたこと、苦労したこと、被災体験と現在の自分の仕事がどうつながっているのかなど、就業するまでの経緯についても語ってもらった。中学生には進路や職業を選択する上で、自分自身で大切にしたい価値観を見出し、自分らしい生き方につなげてもらいたいというねらいがある。

一月には五つのコースで学んだことを教室内で発表しあい、その後各コース代表生徒によるパネルディスカッション「郷土長岡に誇りをもつて生きるために」が行われ、3年生全員が参加し、地域の方、保護者も見学した。防災コースの代表生徒からは、長岡の誇れるところとして、「長岡は、たくさんの教訓を未来の人々に伝え続けて行こうと努力している。教訓を忘れないようにすれば災害が起きても被害を最小限に抑えることができると思う」との発表があった。

年間を通したコーディネートをしてみて、生徒自身の成長を感じることができたのも私たちにとって貴重な経験であった。災害の教訓を未来に活かすことは、被害の軽減にだけでなく、子どもたちにとってその後の生き方を考えることにも結びつく。中越メモリアル回廊の持つ多様な地域資源からいかに教育的価値を見出し、どのように教育的接点を持たせ、生徒たちの学びやすい学習プログラ

三六名の生徒が防災コースを希望してくれることとなった。

七月にはきおくみらいを訪れ、中越大震災の概要を学ぶのと同時に、被災地では地域の人同士で助け合って、自分たちにできることを最大限に活かしあって困難を乗り切ったことをスタッフが強調して伝えた。

また、九月には災害時に役立つ知識・技能を身に付けることを目的に、中越大震災で被災した小千谷市在住の高野真弓さんをお迎えして、災害時でも調理可能なパッククッキング（ポリ袋に食材を入れて湯せんで火を通す調理法）の手法を学んだ。被災時に食に困窮した体験から、食への考え方が変化し、現在は畑を耕して自家栽培した大豆から味噌を仕込んだり、山菜採りや魚釣りを楽しんだりするなど、消費することに頼らない食の在り方を紹介してもらった。パッククッキングという知識や技能だけを学ぶのではなく、被災体験がその後の高野さんの生き方にどう影響を与えたのか、何を大切にしたいと思っているのかを、子どもたちに感じ取ってほしいと思ったからである。パッククッキングでは、実際にカセットコンロとポリ袋を用いて、わかめごはんと切り干し大根サラダを調理し、各自が新聞紙で作成した紙食器を使って食事をした。また他に用意された缶詰や乾物などの食材を使って各班で創作料理にも挑戦した。身近にあるもので工夫をする力は災害時においては非常に重要な力になる。

また、今まで学んできたことを踏まえて、

ムに仕上げていくのが、私たち教育支援コーディネーターの重要な役割である。中越メモリアル回廊の貴重な人材等を教育現場で生かし、子どもたちの確かな「生きる力」につなげられるよう、今後も現場のニーズに合った教育支援を行なっていきたい。

（地域防災力センター 関谷央子）

担当した先生より学習を通しての感想

当校では、新潟県防災教育プログラムに基づく防災教育の充実に向け実践を積み重ねています。活動の柱は、地域に生きる大人の生きざまに触れることと実体験に基づく生きた情報から学ぶことです。

中越防災安全推進機構の皆様からは、活動の計画段階から様々な助言をいただきました。たくさんの講師の候補を紹介していただき、目的の達成に最適な講師の方から学ぶことができました。また、防災に関する最新の情報や防災教育の実践事例を多数紹介していただき大変ありがたかったと思います。

長岡市立東中学校 3年生
総合的な学習の時間
防災コース担当
樋口 太郎 先生



パッククッキングでの
創作料理



紙食器づくり



高野さんから
パッククッキングを教わる生徒



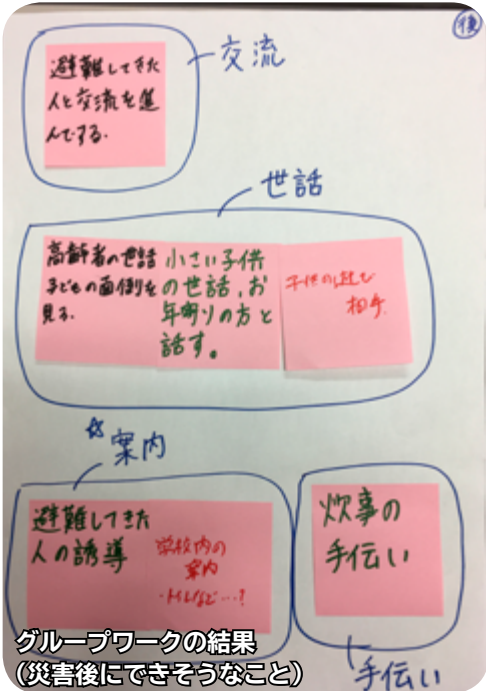
高野真弓さん
（パッククッキング講師）

災害時の食を考える

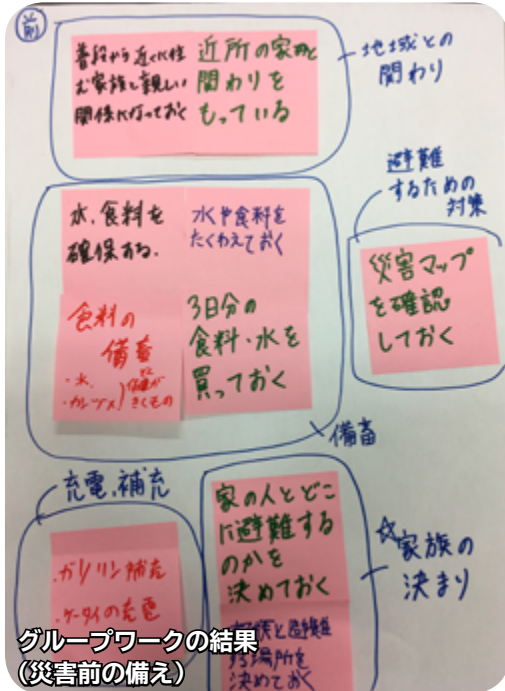
災害時の中学生の
役割を考える



畔上凌さん
（やまこし復興交流館おらたる）



グループワークの結果
（災害後にできそうなこと）



グループワークの結果
（災害前の備え）

「震災アーカイブに関わる近年の動向」

昨年の11月にパシフィコ横浜で「第19回図書館総合展」が開催されました。長岡市立中央図書館文書資料室の長岡市災害復興文庫が、新潟県中越大地震・東日本大震災の記録と記憶を後世へ伝える活動をPRするため、初のブース出展をしましたので、その様子とあわせて総合展について報告します。



総合展のフォーラムの中で議論されていたことやお話を伺った方からの言葉で印象に残ったものを紹介します。

★近年は参加型デジタルアーカイブが盛んになってきた。アーカイブを活かせるのは人次第であり、利用させるための保存をしなければいけない。「いつ、どこで、誰が、どんな状況で」撮影したものなのか、そうした「記録の情報」があれば、後々の分析資料としても記憶としても価値が認められる可能性がある。その「情報」がどこに「ある」のか探せて、見つけられるデジタルアーカイブを作らなければ意味がない。震災アーカイブは、人

図書館総合展とは、二〇一七年で第一九回目を数える図書館、読書・出版、学術情報、資料保存・保管等に関する総合展示会です。図書館業界のみでなく、博物館、文書館、行政関係者、教育関係者、出版社、メディア・情報関連業界からの出展があり、読書・学習環境・学術研究環境についての最新技術と知見が一堂に会します。そのため、一般来場者も年々増え続けているイベントです。

東日本大震災以降、震災・防災関連の出版も増え続け、震災で被災した資料の救済のための修繕、整理、保存も継続して地道に行われています。また、被災地での復興の記憶と震災の記録を後世に伝えるために、一次資料だけでなく、写真や動画の様々な情報メディア媒体でのデジタルアーカイブが、^①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿㏀㏁㏂㏃㏄㏅㏆㏇㏈㏉㏊㏋㏌㏍㏎㏏㏐㏑㏒㏓㏔㏕㏖㏗㏘㏙㏚㏛㏜㏝㏞㏟㏠㏡㏢㏣㏤㏥㏦㏧㏨㏩㏪㏫㏬㏭㏮㏯㏰㏱㏲㏳㏴㏵㏶㏷㏸㏹㏺㏻㏼㏽㏾㏿㐀㐁㐂㐃㐄㐅㐆㐇㐈㐉㐊㐋㐌㐍㐎㐏㐐㐑㐒㐓㐔㐕㐖㐗㐘㐙㐚㐛㐜㐝㐞㐟㐠㐡㐢㐣㐤㐥㐦㐧㐨㐩㐪㐫㐬㐭㐮㐯㐰㐱㐲㐳㐴㐵㐶㐷㐸㐹㐺㐻㐼㐽㐾㐿㑀㑁㑂㑃㑄㑅㑆㑇㑈㑉㑊㑋㑌㑍㑎㑏㑐㑑㑒㑓㑔㑕㑖㑗㑘㑙㑚㑛㑜㑝㑞㑟㑠㑡㑢㑣㑤㑥㑦㑧㑨㑩㑪㑫㑬㑭㑮㑯㑰㑱㑲㑳㑴㑵㑶㑷㑸㑹㑺㑻㑼㑽㑾㑿㒀㒁㒂㒃㒄㒅㒆㒇㒈㒉㒊㒋㒌㒍㒎㒏㒐㒑㒒㒓㒔㒕㒖㒗㒘㒙㒚㒛㒜㒝㒞㒟㒠㒡㒢㒣㒤㒥㒦㒧㒨㒩㒪㒫㒬㒭㒮㒯㒰㒱㒲㒳㒴㒵㒶㒷㒸㒹㒺㒻㒼㒽㒾㒿㓀㓁㓂㓃㓄㓅㓆㓇㓈㓉㓊㓋㓌㓍㓎㓏㓐㓑㓒㓓㓔㓕㓖㓗㓘㓙㓚㓛㓜㓝㓞㓟㓠㓡㓢㓣㓤㓥㓦㓧㓨㓩㓪㓫㓬㓭㓮㓯㓰㓱㓲㓳㓴㓵㓶㓷㓸㓹㓺㓻㓼㓽㓾㓿㔀㔁㔂㔃㔄㔅㔆㔇㔈㔉㔊㔋㔌㔍㔎㔏㔐㔑㔒㔓㔔㔕㔖㔗㔘㔙㔚㔛㔜㔝㔞㔟㔠㔡㔢㔣㔤㔥㔦㔧㔨㔩㔪㔫㔬㔭㔮㔯㔰㔱㔲㔳㔴㔵㔶㔷㔸㔹㔺㔻㔼㔽㔾㔿㕀㕁㕂㕃㕄㕅㕆㕇㕈㕉㕊㕋㕌㕍㕎㕏㕐㕑㕒㕓㕔㕕㕖㕗㕘㕙㕚㕛㕜㕝㕞㕟㕠㕡㕢㕣㕤㕥㕦㕧㕨㕩㕪㕫㕬㕭㕮㕯㕰㕱㕲㕳㕴㕵㕶㕷㕸㕹㕺㕻㕼㕽㕾㕿㖀㖁㖂㖃㖄㖅㖆㖇㖈㖉㖊㖋㖌㖍㖎㖏㖐㖑㖒㖓㖔㖕㖖㖗㖘㖙㖚㖛㖜㖝㖞㖟㖠㖡㖢㖣㖤㖥㖦㖧㖨㖩㖪㖫㖬㖭㖮㖯㖰㖱㖲㖳㖴㖵㖶㖷㖸㖹㖺㖻㖼㖽㖾㖿㗀㗁㗂㗃㗄㗅㗆㗇㗈㗉㗊㗋㗌㗍㗎㗏㗐㗑㗒㗓㗔㗕㗖㗗㗘㗙㗚㗛㗜㗝㗞㗟㗠㗡㗢㗣㗤㗥㗦㗧㗨㗩㗪㗫㗬㗭㗮㗯㗰㗱㗲㗳㗴㗵㗶㗷㗸㗹㗺㗻㗼㗽㗾㗿㘀㘁㘂㘃㘄㘅㘆㘇㘈㘉㘊㘋㘌㘍㘎㘏㘐㘑㘒㘓㘔㘕㘖㘗㘘㘙㘚㘛㘜㘝㘞㘟㘠㘡㘢㘣㘤㘥㘦㘧㘨㘩㘪㘫㘬㘭㘮㘯㘰㘱㘲㘳㘴㘵㘶㘷㘸㘹㘺㘻㘼㘽㘾㘿㙀㙁㙂㙃㙄㙅㙆㙇㙈㙉㙊㙋㙌㙍㙎㙏㙐㙑㙒㙓㙔㙕㙖㙗㙘㙙㙚㙛㙜㙝㙞㙟㙠㙡㙢㙣㙤㙥㙦㙧㙨㙩㙪㙫㙬㙭㙮㙯㙰㙱㙲㙳㙴㙵㙶㙷㙸㙹㙺㙻㙼㙽㙾㙿㚀㚁㚂㚃㚄㚅㚆㚇㚈㚉㚊㚋㚌㚍㚎㚏㚐㚑㚒㚓㚔㚕㚖㚗㚘㚙㚚㚛㚜㚝㚞㚟㚠㚡㚢㚣㚤㚥㚦㚧㚨㚩㚪㚫㚬㚭㚮㚯㚰㚱㚲㚳㚴㚵㚶㚷㚸㚹㚺㚻㚼㚽㚾㚿㜀㜁㜂㜃㜄㜅㜆㜇㜈㜉㜊㜋㜌㜍㜎㜏㜐㜑㜒㜓㜔㜕㜖㜗㜘㜙㜚㜛㜜㜝㜞㜟㜠㜡㜢㜣㜤㜥㜦㜧㜨㜩㜪㜫㜬㜭㜮㜯㜰㜱㜲㜳㜴㜵㜶㜷㜸㜹㜺㜻㜼㜽㜾㜿㝀㝁㝂㝃㝄㝅㝆㝇㝈㝉㝊㝋㝌㝍㝎㝏㝐㝑㝒㝓㝔㝕㝖㝗㝘㝙㝚㝛㝜㝝㝞㝟㝠㝡㝢㝣㝤㝥㝦㝧㝨㝩㝪㝫㝬㝭㝮㝯㝰㝱㝲㝳㝴㝵㝶㝷㝸㝹㝺㝻㝼㝽㝾㝿㞀㞁㞂㞃㞄㞅㞆㞇㞈㞉㞊㞋㞌㞍㞎㞏㞐㞑㞒㞓㞔㞕㞖㞗㞘㞙㞚㞛㞜㞝㞞㞟㞠㞡㞢㞣㞤㞥㞦㞧㞨㞩㞪㞫㞬㞭㞮㞯㞰㞱㞲㞳㞴㞵㞶㞷㞸㞹㞺㞻㞼㞽㞾㞿㟀㟁㟂㟃㟄㟅㟆㟇㟈㟉㟊㟋㟌㟍㟎㟏㟐㟑㟒㟓㟔㟕㟖㟗㟘㟙㟚㟛㟜㟝㟞㟟㟠㟡㟢㟣㟤㟥㟦㟧㟨㟩㟪㟫㟬㟭㟮㟯㟰㟱㟲㟳㟴㟵㟶㟷㟸㟹㟺㟻㟼㟽㟾㟿㠀㠁㠂㠃㠄㠅㠆㠇㠈㠉㠊㠋㠌㠍㠎㠏㠐㠑㠒㠓㠔㠕㠖㠗㠘㠙㠚㠛㠜㠝㠞㠟㠠㠡㠢㠣㠤㠥㠦㠧㠨㠩㠪㠫㠬㠭㠮㠯㠰㠱㠲㠳㠴㠵㠶㠷㠸㠹㠺㠻㠼㠽㠾㠿㡀㡁㡂㡃㡄㡅㡆㡇㡈㡉㡊㡋㡌㡍㡎㡏㡐㡑㡒㡓㡔㡕㡖㡗㡘㡙㡚㡛㡜㡝㡞㡟㡠㡡㡢㡣㡤㡥㡦㡧㡨㡩㡪㡫㡬㡭㡮㡯㡰㡱㡲㡳㡴㡵㡶㡷㡸㡹㡺㡻㡼㡽㡾㡿㢀㢁㢂㢃㢄㢅㢆㢇㢈㢉㢊㢋㢌㢍㢎㢏㢐㢑㢒㢓㢔㢕㢖㢗㢘㢙㢚㢛㢜㢝㢞㢟㢠㢡㢢㢣㢤㢥㢦㢧㢨㢩㢪㢫㢬㢭㢮㢯㢰㢱㢲㢳㢴㢵㢶㢷㢸㢹㢺㢻㢼㢽㢾㢿㣀㣁㣂㣃㣄㣅㣆㣇㣈㣉㣊㣋㣌㣍㣎㣏㣐㣑㣒㣓㣔㣕㣖㣗㣘㣙㣚㣛㣜㣝㣞㣟㣠㣡㣢㣣㣤㣥㣦㣧㣨㣩㣪㣫㣬㣭㣮㣯㣰㣱㣲㣳㣴㣵㣶㣷㣸㣹㣺㣻㣼㣽㣾㣿㤀㤁㤂㤃㤄㤅㤆㤇㤈㤉㤊㤋㤌㤍㤎㤏㤐㤑㤒㤓㤔㤕㤖㤗㤘㤙㤚㤛㤜㤝㤞㤟㤠㤡㤢㤣㤤㤥㤦㤧㤨㤩㤪㤫㤬㤭㤮㤯㤰㤱㤲㤳㤴㤵㤶㤷㤸㤹㤺㤻㤼㤽㤾㤿㥀㥁㥂㥃㥄㥅㥆㥇㥈㥉㥊㥋㥌㥍㥎㥏㥐㥑㥒㥓㥔㥕㥖㥗㥘㥙㥚㥛㥜㥝㥞㥟㥠㥡㥢㥣㥤㥥㥦㥧㥨㥩㥪㥫㥬㥭㥮㥯㥰㥱㥲㥳㥴㥵㥶㥷㥸㥹㥺㥻㥼㥽㥾㥿㦀㦁㦂㦃㦄㦅㦆㦇㦈㦉㦊㦋㦌㦍㦎㦏㦐㦑㦒㦓㦔㦕㦖㦗㦘㦙㦚㦛㦜㦝㦞㦟㦠㦡㦢㦣㦤㦥㦦㦧㦨㦩㦪㦫㦬㦭㦮㦯㦰㦱㦲㦳㦴㦵㦶㦷㦸㦹㦺㦻㦼㦽㦾㦿㧀㧁㧂㧃㧄㧅㧆㧇㧈㧉㧊㧋㧌㧍㧎㧏㧐㧑㧒㧓㧔㧕㧖㧗㧘㧙㧚㧛㧜㧝㧞㧟㧠㧡㧢㧣㧤㧥㧦㧧㧨㧩㧪㧫㧬㧭㧮㧯㧰㧱㧲㧳㧴㧵㧶㧷㧸㧹㧺㧻㧼㧽㧾㧿㨀㨁㨂㨃㨄㨅㨆㨇㨈㨉㨊㨋㨌㨍㨎㨏㨐㨑㨒㨓㨔㨕㨖㨗㨘㨙㨚㨛㨜㨝㨞㨟㨠㨡㨢㨣㨤㨥㨦㨧㨨㨩㨪㨫㨬㨭㨮㨯㨰㨱㨲㨳㨴㨵㨶㨷㨸㨹㨺㨻㨼㨽㨾㨿㩀㩁㩂㩃㩄㩅㩆㩇㩈㩉㩊㩋㩌㩍㩎㩏㩐㩑㩒㩓㩔㩕㩖㩗㩘㩙㩚㩛㩜㩝㩞㩟㩠㩡㩢㩣㩤㩥㩦㩧㩨㩩㩪㩫㩬㩭㩮㩯㩰㩱㩲㩳㩴㩵㩶㩷㩸㩹㩺㩻㩼㩽㩾㩿㪀㪁㪂㪃㪄㪅㪆㪇㪈㪉㪊㪋㪌㪍㪎㪏㪐㪑㪒㪓㪔㪕㪖㪗㪘㪙㪚㪛㪜㪝㪞㪟㪠㪡㪢㪣㪤㪥㪦㪧㪨㪩㪪㪫㪬㪭㪮㪯㪰㪱㪲㪳㪴㪵㪶㪷㪸㪹㪺㪻㪼㪽㪾㪿㫀㫁㫂㫃㫄㫅㫆㫇㫈㫉㫊㫋㫌㫍㫎㫏㫐㫑㫒㫓㫔㫕㫖㫗㫘㫙㫚㫛㫜㫝㫞㫟㫠㫡㫢㫣㫤㫥㫦㫧㫨㫩㫪㫫㫬㫭㫮㫯㫰㫱㫲㫳㫴㫵㫶㫷㫸㫹㫺㫻㫼㫽㫾㫿㬀㬁㬂㬃㬄㬅㬆㬇㬈㬉㬊㬋㬌㬍㬎㬏㬐㬑㬒㬓㬔㬕㬖㬗㬘㬙㬚㬛㬜㬝㬞㬟㬠㬡㬢㬣㬤㬥㬦㬧㬨㬩㬪㬫㬬㬭㬮㬯㬰㬱㬲㬳㬴㬵㬶㬷㬸㬹㬺㬻㬼㬽㬾㬿㭀㭁㭂㭃㭄㭅㭆㭇㭈㭉㭊㭋㭌㭍㭎㭏㭐㭑㭒㭓㭔㭕㭖㭗㭘㭙㭚㭛㭜㭝㭞㭟㭠㭡㭢㭣㭤㭥㭦㭧㭨㭩㭪㭫㭬㭭㭮㭯㭰㭱㭲㭳㭴㭵㭶㭷㭸㭹㭺㭻㭼㭽㭾㭿㮀㮁㮂㮃㮄㮅㮆㮇㮈㮉㮊㮋㮌㮍㮎㮏㮐㮑㮒㮓㮔㮕㮖㮗㮘㮙㮚㮛㮜㮝㮞㮟㮠㮡㮢㮣㮤㮥㮦㮧㮨㮩㮪㮫㮬㮭㮮㮯㮰㮱㮲㮳㮴㮵㮶㮷㮸㮹㮺㮻㮼㮽㮾㮿㯀㯁㯂㯃㯄㯅㯆㯇㯈㯉㯊㯋㯌㯍㯎㯏㯐㯑㯒㯓㯔㯕㯖㯗㯘㯙㯚㯛㯜㯝㯞㯟㯠㯡㯢㯣㯤㯥㯦㯧㯨㯩㯪㯫㯬㯭㯮㯯㯰㯱㯲㯳㯴㯵㯶㯷㯸㯹㯺㯻㯼㯽㯾㯿㰀㰁㰂㰃㰄㰅㰆㰇㰈㰉㰊㰋㰌㰍㰎㰏㰐㰑㰒㰓㰔㰕㰖㰗㰘㰙㰚㰛㰜㰝㰞㰟㰠㰡㰢㰣㰤㰥㰦㰧㰨㰩㰪㰫㰬㰭㰮㰯㰰㰱㰲㰳㰴㰵㰶㰷㰸㰹㰺㰻㰼㰽㰾㰿㱀㱁㱂㱃㱄㱅㱆㱇㱈㱉㱊㱋㱌㱍㱎㱏㱐㱑㱒㱓㱔㱕㱖㱗㱘㱙㱚㱛㱜㱝㱞㱟㱠㱡㱢㱣㱤㱥㱦㱧㱨㱩㱪㱫㱬㱭㱮㱯㱰㱱㱲㱳㱴㱵㱶㱷㱸㱹㱺㱻㱼㱽㱾㱿㲀㲁㲂㲃㲄㲅㲆㲇㲈㲉㲊㲋㲌㲍㲎㲏㲐㲑㲒㲓㲔㲕㲖㲗㲘㲙㲚㲛㲜㲝㲞㲟㲠㲡㲢㲣㲤㲥㲦㲧㲨㲩㲪㲫㲬㲭㲮㲯㲰㲱㲲㲳㲴㲵㲶㲷㲸㲹㲺㲻㲼㲽㲾㲿㳀㳁㳂㳃㳄㳅㳆㳇㳈㳉㳊㳋㳌㳍㳎㳏㳐㳑㳒㳓㳔㳕㳖㳗㳘㳙㳚㳛㳜㳝㳞㳟㳠㳡㳢㳣㳤㳥㳦㳧㳨㳩㳪㳫㳬㳭㳮㳯㳰㳱㳲㳳㳴㳵㳶㳷㳸㳹㳺㳻㳼㳽㳾㳿㴀㴁㴂㴃㴄㴅㴆㴇㴈㴉㴊㴋㴌㴍㴎㴏㴐㴑㴒㴓㴔㴕㴖㴗㴘㴙㴚㴛㴜㴝㴞㴟㴠㴡㴢㴣㴤㴥㴦㴧㴨㴩㴪㴫㴬㴭㴮㴯㴰㴱㴲㴳㴴㴵㴶㴷㴸㴹㴺㴻㴼㴽㴾㴿㵀㵁㵂㵃㵄㵅㵆㵇㵈㵉㵊㵋㵌㵍㵎㵏㵐㵑㵒㵓㵔㵕㵖㵗㵘㵙㵚㵛㵜㵝㵞㵟㵠㵡㵢㵣㵤㵥㵦㵧㵨㵩㵪㵫㵬㵭㵮㵯㵰㵱㵲㵳㵴㵵㵶㵷㵸㵹㵺㵻㵼㵽㵾㵿㶀㶁㶂㶃㶄㶅㶆㶇㶈㶉㶊㶋㶌㶍㶎㶏㶐㶑㶒㶓㶔㶕㶖㶗㶘㶙㶚㶛㶜㶝㶞㶟㶠㶡㶢㶣㶤㶥㶦㶧㶨㶩㶪㶫㶬㶭㶮㶯㶰㶱㶲㶳㶴㶵㶶㶷㶸㶹㶺㶻㶼㶽㶾㶿㷀㷁㷂㷃㷄㷅㷆㷇㷈㷉㷊㷋㷌㷍㷎㷏㷐㷑㷒㷓㷔㷕㷖㷗㷘㷙㷚㷛㷜㷝㷞㷟㷠㷡㷢㷣㷤㷥㷦㷧㷨㷩㷪㷫㷬㷭㷮㷯㷰㷱㷲㷳㷴㷵㷶㷷㷸㷹㷺㷻㷼㷽㷾㷿㸀㸁㸂㸃㸄㸅㸆㸇㸈㸉㸊㸋㸌㸍㸎㸏㸐㸑㸒㸓㸔㸕㸖㸗㸘㸙㸚㸛㸜㸝㸞㸟㸠㸡㸢㸣㸤㸥㸦㸧㸨㸩㸪㸫㸬㸭㸮㸯㸰㸱㸲㸳㸴㸵㸶㸷㸸㸹㸺㸻㸼㸽㸾㸿㹀㹁㹂㹃㹄㹅㹆㹇㹈㹉㹊㹋㹌㹍㹎㹏㹐㹑㹒㹓㹔㹕㹖㹗㹘㹙㹚㹛㹜㹝㹞㹟㹠㹡㹢㹣㹤㹥㹦㹧㹨㹩㹪㹫㹬㹭㹮㹯㹰㹱㹲㹳㹴㹵㹶㹷㹸㹹㹺㹻㹼㹽㹾㹿㺀㺁㺂㺃㺄㺅㺆㺇㺈㺉㺊㺋㺌㺍㺎㺏㺐㺑㺒㺓㺔㺕㺖㺗㺘㺙㺚㺛㺜㺝㺞㺟㺠㺡㺢㺣㺤㺥㺦㺧㺨㺩㺪㺫㺬㺭㺮㺯㺰㺱㺲㺳㺴㺵㺶㺷㺸㺹㺺㺻㺼㺽㺾㺿㻀㻁㻂㻃㻄㻅㻆㻇㻈㻉㻊㻋㻌㻍㻎㻏㻐㻑㻒㻓㻔㻕㻖㻗㻘㻙㻚㻛㻜㻝㻞㻟㻠㻡㻢㻣㻤㻥㻦㻧㻨㻩㻪㻫㻬㻭㻮㻯㻰㻱㻲㻳㻴㻵㻶㻷㻸㻹㻺㻻㻼㻽㻾㻿㼀㼁㼂㼃㼄㼅㼆㼇㼈㼉㼊㼋㼌㼍㼎㼏㼐㼑㼒㼓㼔㼕㼖㼗㼘㼙㼚㼛㼜㼝㼞㼟㼠㼡㼢㼣㼤㼥㼦㼧㼨㼩㼪㼫㼬㼭㼮㼯㼰㼱㼲㼳㼴㼵㼶㼷㼸㼹㼺㼻㼼㼽㼾㼿㽀㽁㽂㽃㽄㽅㽆㽇㽈㽉㽊㽋㽌㽍㽎㽏㽐㽑㽒㽓㽔㽕㽖㽗㽘㽙㽚㽛㽜㽝㽞㽟㽠㽡㽢㽣㽤㽥㽦㽧㽨㽩㽪㽫㽬㽭㽮㽯㽰㽱㽲㽳㽴㽵㽶㽷㽸㽹㽺㽻㽼㽽㽾㽿㿀㿁㿂㿃㿄㿅㿆㿇㿈㿉㿊㿋㿌㿍㿎㿏㿐㿑㿒㿓㿔㿕㿖㿗㿘㿙㿚㿛㿜㿝㿞㿟㿠㿡㿢㿣㿤㿥㿦㿧㿨㿩㿪㿫㿬㿭㿮㿯㿰㿱㿲㿳㿴㿵㿶㿷㿸㿹㿺㿻㿼㿽㿾㿿

的ネットワークが重要であり、地域の皆さんが参加し、共に創りあげていくもの。自分たちの地域のまちの歴史を紡いでいくこと。復興は日常と連続きである。

★文字に起こして、印刷して保存するのが一番長持ちするが、それだけが今のアーカイブではない。「語り」は響く。語りついでいくことの大切さは重要。

★記録されないこと、薄れることが課題で、より早く作って見せられるようにしていく。この場で出てきた課題を挙げていくこと。広く浅く復興支援していくことは過ぎた。

★紙だったものがどんどんデジタル化された時、保存するものしなものの境界線が曖昧になっている。

★なんでもどこかに突っ込んでおいて、取り出せなくてもいいから蓄積はしておいてほしい。アーカイブ構築の先にあるものはナビゲーション。ナビとそのベースになるインデックスの構築を視野に入れながら構築してもらいたい。

熊本地震から見えた「備えるべき」もの・ことというフォーラムのなかでは、「必要な人に必要な時間に我々も情報を届けたいが、そこが課題である。」「情報発信の時期が難しかった。」「どんな情報を、誰に向けて、どのようなメディア媒体を使って発信するのが支援の課題だった」という登壇者からの報告がありました。総合展のような空間で遠くの人と繋がることは今の時代は簡単に出来ます。ですが、顔が見える範囲（フィールド）での繋がりを作ることはまだ弱いです。

日頃、平時からの繋がりでいかに顔が見える関係を作るか。連絡を気軽に取り合える関

係、普段から顔が見える関係こそが一番の備えに繋がった。それが重要だったということ。震災の記憶の風化が問題になるなか、中越を体験した私たちの地域もそれぞれの立場から今一度このことを考えて生活していかなければと感じました。

近年はlibraryで学芸員が働き、積極的な物の収集が行われたり、地域に一歩飛び出して働く図書館員の活動事例が多くなっています。文化資源利活用ためのMLA(Museum Library Archives)連携が盛んに行われるようになってきました。

おぢや震災ミュージアムそなえ館で勤務しながら、図書館員だからこそ出来る活動というものを私自身考えるきっかけにもなりました。フォーラムの記録は、図書館総合展HPで公開されています。皆さんもご覧になってみてください。

（おぢや震災ミュージアムそなえ館 目黒 幸恵）



糸魚川市大規模火災被災地支援活動のご報告 「糸魚川市地域たすけあいボランティアセンター」運営支援



平成二八年一二月に起こった糸魚川市での大規模火災では、焼損棟数一四七棟という過去二〇年間で最大の被害が発生してしまいました。

今回の災害では、糸魚川市社会福祉協議会によって「糸魚川市地域たすけあいボランティアセンター」が設置され、当機構が事務局を務める「チーム中越」からも、当機構や中越市民防災安全士会から人員を派遣し、ボランティアセンターの運営支援に当たりました。ボランティアセンターは基本的に地元社協が主となり運営を担います。しかしながら、人員的な制約もあり、糸魚川市社協だけでは運営が困難な状況であったことや、地元社協だからこそ対応できる福祉的なニーズに対応してもらえよう、ボランティアセンターの運営は、糸魚川青年会議所や県内社協、NPOなどの協働によって行われました。

地震や水害などと異なり被災された皆さんの多くが避難所や自宅ではなく、親戚宅などに避難をされたため、被災者の方と接する機会が限られたことからニーズ調査が思うように進まなかったり、被災家屋からの思い出の品探しを行うにも解体業者との連携が必要であったりと、今回の災害では火災ならではの課題も多くありました。しかしながら、被災者からの相談対応については弁護士会などと連携がなされたほか、ボランティアセンターの周知についても、企業などの協力で街頭や店舗などへのチラシの設置がなされたり、行政との連携で周知が行われ、思い出の品探しの活動についても解体にあたる建設業協会と連携して行われるなど、様々な課題に対して災害支援に関わる様々な団体が連携・協働することで支援活動が進められました。多様な団体が連携・協働できたからこそ、比較的スムーズに災害の支援活動が進められたのが今回の災害支援の特徴の一つなのだと思います。

現在もボランティアセンターの規模は縮小されたものの、思い出の品探しなどの活動は続けられています（平成二九年二月時点）。また、被災地の本格的な復興はまだこれからです。被災した地域をどのように復興させていくのか、これから地域住民や行政などで話し合いをしながら作り上げていかなければなりません。糸魚川では、糸魚川地域たすけあいボランティアセンターの他にも「がんばろう糸魚川プロジェクト」などの地域団体が立ち上がり、被災地の支援活動を行っています。チーム中越では、中越の復興の経験を活かし、これからの地域主体の復興を応援していきます。

（地域防災力センター 河内 毅）

「インフォメーション」

【そなえ館リニューアル工事に伴う休館のお知らせ】

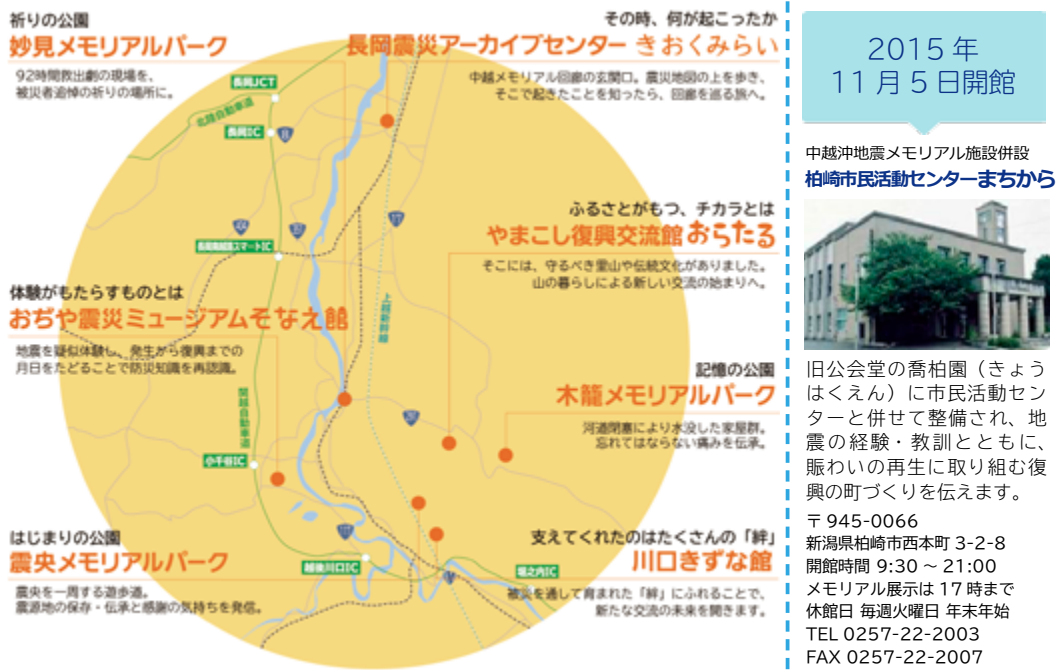
そなえ館は開館から 5 年を迎え、累計 10 万人以上のみなさまに中越大震災の教訓をお伝えしてきました。これからも多くのみなさまへ教訓を伝え続けるため、このたび館内をリニューアルすることとなりました。恐れ入りますが下記の期間、館内のリニューアル工事に伴い休館とさせていただきます。みなさまにはご迷惑をおかけいたしますが、ご理解いただきますよう、お願い申し上げます。

休館期間：平成 29 年 3 月 13 日（月）～ 4 月 22 日（土）

平成 29 年 4 月 23 日（日）にリニューアルオープンいたします。乞うご期待！！



「中越メモリアル回廊全体図」



会員募集中！

当機構では、地域防災への取り組みや被災地への支援活動に賛同し、応援して下さる会員の方を募集しています。皆様のご入会をお待ちしています。
 参加資格：当機構の活動に関心のある 18 歳以上の方なら、どなたでも参加できます。
 会員特典：当機構が主催する研修・講座・イベント等のご案内をいたします。
 年会費：正会員 5,000 円 個人賛助会員 3,000 円 団体賛助会員 100,000 円（1 口以上）
 ※申込書は当機構ホームページよりダウンロードできます。

公益社団法人 中越防災安全推進機構 機関紙 <COSSS report> 第 17 号 2017 年 3 月発行

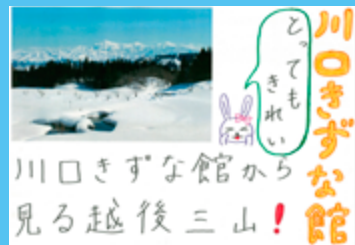
発行人：諸橋和行 編集：畔上凌 阿部巧 関谷央子 中村充 松井千明 目黒幸恵

〒940-0062 新潟県長岡市大手通 2-6 フェニックス大手イースト 2F 長岡震災アーカイブセンター きおくみらい内

TEL：0258-39-5525 FAX:0258-39-5526

E-mail:info@c-bosai-anzen-kikou.jp http://c-bosai-anzen-kikou.jp/

きずな館看板娘がおくる かわぐちの日常4コマ



お弁当やお菓子の持ち込みOKです。越後三山を見ながらのごはんは最高です。ぜひ遊びに来て下さい。

また、川口きずな館はカフェの営業も行っておりますのでお立ち寄りの際はご利用下さい。

持込企画・やってみたいイベント大募集中。お気軽にお電話下さい。TEL 0258-89-3620

まんがの作者



川口きずな館
新人スタッフ
大淵 朝香

施設のご案内

長岡震災アーカイブセンター きおくみらい

〒940-0062
新潟県長岡市大手通 2-6 2 階
開館時間 平 日 10:00～18:00
土日祝 10:00～17:00
休館日 毎週火曜日 年末年始
TEL 0258-39-5525/FAX 39-5526

おぢや震災ミュージアム そなえ館

〒947-0026
新潟県小千谷市上ノ山 4-4-2 2 階
開館時間 9:00～17:00
休館日 毎週水曜日 年末年始
TEL 0258-89-7480/FAX 89-7485

川口きずな館

〒949-7503
新潟県長岡市川口中山 1441
開館時間 10:00～17:00
休館日 毎週火曜日 年末年始
TEL 0258-89-3620/FAX 89-3621

やまこし復興交流館 おらたる

〒940-0204
新潟県長岡市山古志竹沢 2835
開館時間 9:00～17:00
休館日 毎週火曜日 年末年始
TEL 0258-41-1203/FAX 41-1204